様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０２１８

研究課題名（和文）中世百科全書的テキストの成立基盤に関する総合的研究

研究課題名（英文）Study to clarify the social base which a book to supply encyclopedia-like knowledge to in late Middle Ages was written

研究代表者
小助川　元太（KOSUKEGAWA, Ganta）

愛媛大学・教育学部・准教授

研究者番号：３０３５３３１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の主たる目的は、中世後期における政治や文化を支えた知の問題を、百科全書的なテキスト群の生成と享受という視点から解明することである。『ｱｲ嚢鈔』『後素集』『源平盛衰記』を中心に、『塵荊鈔』『筆結物語』『帝鑑図説』『八幡愚童訓』なども研究対象に加え研究を進めた。その結果、多くが持つ問答形式は、応仁の乱前後から安土桃山時代にかけての学問のスタイルを反映したものである可能性が高いこと、禅林での最先端の学問が、それらに平易な形で入り込んでくる傾向にあること、そして、百科事典的傾向を持つ作品の多くが、武家の子弟を対象として書かれた可能性があることなどがわかってきた。

研究成果の概要（英文）：The main purpose of my study is to elucidate a problem of the intellect that supported politics and culture in the late stage of the Middle Ages from a viewpoint called generation and the enjoyment of the encyclopedic text group.I pushed forward a study in " Jinkeisho " " Hikketsumonogatari " Teikan zusetsu " " Hachimangudokun in addition to a study mainly on "Ainosho" "Kososyu" "Genpeijosuiki ".Then I clarified that the question and answer form of those works having reflected a style of the study from before and after Onin War to the Azuchimomoyama era, thing that the highest study in the temple of the Zen sect affected, most of the encyclopedia-like work might be written for the child of the warrior class.

研究分野：国文学

キーワード：中世文学　百科事典

１．研究開始当初の背景

申請者は室町時代の百科事典『壒嚢鈔』や、戦国武将による百科全書的編纂物『月庵酔醒記』、漢画の享受を背景として編述された画学全書『後素集』などを、中世日本社会に特有の知的営為を共通の背景として成り立っている編纂物と考え、それらを仮に「百科全書的テキスト」と名付けた。これらの作品群に共通する特徴は、以下のとおりである。

⑴物事の既験や約束事、故事などの情報を読者に示すことを目的とした書物である。

⑵先行する特定の作品に依存せず、それ自体が一つの作品として成り立っている。

⑶中国の類書の影響もあるが、編者の編述目的・用途などに応じて、独自の編纂方法を採っている。

⑷記事内容が、先行資料からの引用ばかりではなく、雑談や講釈（注釈）、聞き書きといったオーラルな媒体や、舶来の絵手本・粉本等の図像媒体を通して蓄積された編者個人の知識によっている。

⑸国家的事業としてではなく、それぞれの目的に応じて、一つの形にまとめていこうとする個人の意志によって成り立っている。

申請者は、「中世後期成立の百科全書的テキストに関する基礎的研究」（基盤研究（C）平成 21 年～23 年、課題番号 21520226、代表者：小助川元太）において、上記のような特徴を持つテキストのありかたを、中世特有の一つの表現様式と捉え、それらに共通する特徴を洗い出し、整理する作業を行うと同時に、それらの編者を取り巻く環境に関する調査を行ったが、その次の段階として、研究の対象を百科事典的な編纂物から、百科全書的な特徴を持つ物語群へと広げ、それらの生成や享受の問題を解明する必要性を感じた。

２．研究の目的

本研究は、従来の文学作品中心の研究では顧みられなかった、百科全書的テキストを、一つのジャンルとして取り上げ、それらに共通する特徴を分析し、さらにはそれらが成立した社会的文化的背景を明らかにすることによって、中世後期特有の知的営為に迫り、その歴史的文化的意義を問うものである。そこで，本研究においては，以下の３項目を柱として研究を進めた。

⑴百科全書的テキストの構成についての研究

日本における百科全書的テキストの特徴としては、そのほとんどが中国で編述された辞典類のような分類方法ではなく、編者の恣意によると思われる分類によって編述されている点が挙げられる。また、その展開方法は、連想によるものである可能性が高い。そこで、それらのテキストの全体的な構成と、項目ごとの繋がりが、どのような特徴を持っているのかを、具体的事例を挙げながら分類しながら明らかにしていく。その際に、連歌的な発想や雑談的な発想からの影響がなかったかどうかを、他の文芸作品や資料をもとに検証していく。

⑵百科全書的内容を持つ作品とその特徴についての研究

たとえば『源平盛衰記』は『平家物語』を再編した「物語」であり、『壒嚢鈔』のような純粋な百科全書的テキストとはいいがたいが、しばしばストーリーの流れを分断する形で、『壒嚢鈔』と同じように物事の起源の説明を入れたり、関連する説話を列挙したりするという特徴が見られる。そういった部分を洗い出し、他の百科全書的テキストの記事との比較を行うことによって、まずは『源平盛衰記』と百科全書的テキストとの共通性や差異、そしてその根本に何があるのかを明らかにする。また、『源平盛衰記』の世界と隣接するものとしての室町物語の類にも注目し、『筆結物語』などといった百科全書的特徴を持つ作品群の特徴についても、整理をする。

⑶テキストをとりまく背景についての研究

『壒嚢鈔』の編者行誉は、足利将軍家との繋がりの強かった東岩蔵寺の一の僧であり、醍

醐寺所蔵『僧某（行誉）年譜』によれば、畠山氏との繋がりもあったようである。また、『月庵酔醒記』編者の一色直朝は古河公方に仕える大名であった。また、『後素集』編者の狩野一渓は、大坂夏の陣の後に、豊臣から徳川に仕えた絵師であった。また、先にも触れたように、彼らはそれぞれの時代において、当代の知識人たちとの交流があったと思われる。だが、現在わかっているのはこの程度であり、こういった百科全書的テキスト成立の背景に関わる編者をとりまく環境についての調査は緒に就いたばかりである。内部徴証および周辺資料の精査によってこれらの問題をできるかぎり明らかにする。

３．研究の方法

初年度は，前記の研究目的のもとに，基礎的調査を進めたが，時間的な制約や最終的な成果発表研究の都合から，２年目よりテーマをある程度絞り込んで調査を進める方向に切り替えた。具体的な研究方法と手順は以下のとおりである。

⑴『壒嚢鈔』の調査

『壒嚢鈔』のデータベース化作業を行う予定であったが、なかなか進まないため中断し、『壒嚢鈔』と『拾芥抄』『塵袋』『下学集』『榻鳴暁筆』『月庵酔醒記』などの本邦の百科全書的編纂物との構成・内容比較と『芸文類聚』『初学記』『太平御覧』『太平広記』『冊府元亀』など中国の類書との構成を比較する作業を行った。同時に、『壒嚢鈔』の伝本の調査も行った。

⑵『後素集』の説話と抄物の記事の比較調査

『後素集』の電子化作業と同時に、『錦繍段鈔』『三体詩抄』『燈前夜話』『中華若木詩抄』といった比較的享受者の多かったと思われる抄物を調査し、『後素集』の記事との比較を行った。

⑶和訳本『帝鑑図説』の翻刻

『後素集』の成立とも関係の深い『帝鑑図説』の受容を明らかにする研究の一環として、寛永４年に刊行された和訳本『帝鑑図説』の翻刻（電子化）作業を進めた。同時に、その作業過程の中で、元となった明版や秀頼版の『帝鑑図説』との比較も行った。

⑷『源平盛衰記』の平家物語再編方法の分析

異本との校合や歴史資料との比較によって、『源平盛衰記』の平家物語再編の方法を分析しながら、『源平盛衰記』が目指していた方向性と、百科全書的な特徴との相関性を探る研究を行った。

⑸百科全書的特徴を持つ室町物語の分析

室町物語の一種と考えられる『塵荊鈔』と『筆結物語』は、問答によって種々雑多な知識を披瀝することを、その中心とした物語である。問答というスタイルやそこで披瀝される知識の内容を分析し、他の百科全書的編纂物や取り上げられる内容に関連する外部資料との比較をすることにより、こうした特徴を持つ物語が登場した背景を探った。

⑹『八幡愚童訓』の研究

『壒嚢鈔』の編者に関わる研究として、行誉書写本『八幡愚童訓』が分類される甲類系『八幡愚童訓』の位置づけを考察した。また、関連して、対馬本の特徴と諸本中での位置づけについて考察した。

４．研究成果

⑴『壒嚢鈔』の研究

本研究の主たる研究対象である『壒嚢鈔』について、百科事典的な内容を持つ編纂物ではあるが、それが、既存のいかなるジャンルに分類できるのかという問題について、先行の作品である『塵袋』、後の作品である『榻鳴暁筆』との比較を中心に考証し、随筆の一種と捉えるべきであることを発表した。また、調査の過程で、『壒嚢鈔』の新たな伝本も発見した。現在、書写奥書の情報からもとの所有者や書写者について、調査をしているところである。

⑵『後素集』の研究

『後素集』が『語園』のような本邦撰述の漢故事説話集の影響を受けていることから、室町期に中国から輸入された最先端の学問的な成果が反映されている可能性を考え、そうした学問的成果を比較的平易な日本語で解説しているものとして、五山僧による抄物を精査したところ、『錦繍段鈔』や『燈前夜話』にほぼ重なる表現が見られることを発見した。それ以外にも、『後素集』に見られる〈絵姿女房譚〉が、室町における禅林の学問を背景としたものであることがわかってきた。本研究の成果の一部は、2012 年 9 月に学習院女子大学で開催された伝承文学研究会大会にて報告し、『伝承文学研究』62 号に論文が掲載された。

⑶和訳本『帝鑑図説』の翻刻と公開

『後素集』が引用する『帝鑑図説』は、明の張居正による絵本であるが、『後素集』が編述された元和 9 年（1623）の 4 年後の寛永 4 年（1627）に和訳本が刊行された。和訳本『帝鑑図説』については、中世後期から近世初期にかけての中国文化の受容のあり方を考える上で、重要な資料の一つであると考えるが、本研究を開始した時点では、まだ翻刻がなかったため、毎年 2 巻のペースで翻刻を行い公開してきた。残り 2 巻を残すのみであるが、巻 5 以降の翻刻本文については、所属学部の紀要に掲載され、Web 上での公開もされているため、多くの研究者に利用してもらえるものと考える。

⑷『塵荊鈔』『筆結物語』における百科事典的特徴について

『塵荊鈔』『筆結物語』は室町物語の一種と考えられるが、その内容は、問答によって種々様々な知識を披瀝するという『壒嚢鈔』に通じる百科事典的な内容を持つものである。その問答の内容が、応仁の乱前後の武家故実と重なることを明らかにした。その成果の一部について、2014 年 8 月にスロヴェニアのリュブヤナ大学で開催されたヨーロッパ日本研究協会（EAJS）の国際会議で、「Commentarial Aspects in Literary Works and Encyclopedias」と題する発表を行った。

⑸『源平盛衰記』の再編方法の分析

百科全書的な作品と呼ばれる『源平盛衰記』が、既成の平家物語をどのような手法で再編していったのか、そして、そこにはどのような思想的・文化的基盤が横たわっているのかを解明するために、いくつかの場面を、諸本と比較しながら分析した。この研究成果については、2012 年 6 月に県立広島大学で開催された古典研究会で、「『源平盛衰記』の方法—〈通盛最期〉を中心に—」と題する発表を行い、『愛媛国文研究』62 号に論文を掲載した。

⑹　『八幡愚童訓』の問題

『壒嚢鈔』の編者に関わる研究として、行誉書写本『八幡愚童訓』が分類される甲類系『八幡愚童訓』の諸本の構成比較をし、行誉書写本の特徴を明らかにした。また、以前に発見し翻刻をした対馬本の特徴と諸本中での位置づけについて考察し、発表した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① <u>小助川元太</u>、「〈翻刻〉奈良県立図書情報館蔵『帝鑑図説』（寛永四年刊本）巻九～巻十」、愛媛大学教育学部紀要、査読無、61、2014、pp.235-249.

② <u>小助川元太</u>、「〈翻刻〉奈良県立図書情報館蔵『帝鑑図説』（寛永四年刊本）巻七～巻八」、愛媛大学教育学部紀要、査読無、60、2013、pp.332-344.

③ <u>小助川元太</u>、「『後素集』の画題解説と説話—禅林の文化との関わりから—」、伝承文学研究、査読有、2013、62, pp.1-13.

④ 小助川元太、「異本で読む『平家物語』—〈宇治川の先陣〉を読む—」、愛媛国文研究、査読無、62、2012、pp.40-51.

⑤ 小助川元太、「『源平盛衰記』における〈通盛最期〉—剛の者としての通盛像造型の方法—」、愛媛国文研究、査読無、62、2012、pp.1-13.

⑥ 小助川元太、「〈翻刻〉奈良県立図書情報館蔵『帝鑑図説』（寛永四年刊本）巻五～巻六」、愛媛大学教育学部紀要、査読無、59、2012、pp.330-348.

〔学会発表〕（計９件）

① 小助川元太、「中世後期の百科事典と文学—『壒嚢鈔』『源平盛衰記』『塵荊抄』『筆結の物語』を中心に—」、伝承文学研究会関西例会、2014 年、12 月 2 日、キャンパスプラザ京都、京都府京都市.

② 小助川元太、「教材としての古文と作品としての古典文学（シンポジウム「教科書と文学」）」、日本文学協会第 69 回大会、2014 年 11 月 16 日、学習院大学、東京都.

③ Ganta Kosukegawa , Commentarial Aspects in Literary Works and Encyclopedias , 14th International Conference of the European Association for Japanese Studies, 29 August 2014 , LjubljanaUniversity –Slovenia, Ljubljana.

④ 小助川元太、「中世後期の類書と随筆—『壒嚢鈔』を中心に—」、伝承文学研究会関西例会、2014 年、2 月 23 日、キャンパスプラザ京都、京都府京都市.

⑤ 小助川元太、「『源平盛衰記』の日付から見える編集意識について —殿下事会・鹿谷酒宴を中心に—」、古典研究会、2013 年、9 月 21 日、県立広島大学、広島県広島市.

⑥ 小助川元太、「対馬宗家文庫蔵『八幡大菩薩御縁起愚童記』考」、国文学研究資料館基幹研究「文学における中央と地方」第１回研究会、2013 年 6 月 7 日、国文学研究資料館、東京都立川市.

⑦ 小助川元太、「行誉書写本『八幡宮愚童訓』考」、軍記と語り物研究会、2013 年 1 月 27 日、早稲田大学、東京都.

⑧ 小助川元太、「画題解説と説話（シンポジウム「禅林の文化と説話—絵画と抄物をめぐって—」）」、伝承文学研究会大会、2012 年 9 月 1 日、学習院女子大学、東京都.

⑨ 小助川元太、「『源平盛衰記』の方法—〈通盛最期〉を中心に—」、古典研究会、2012 年 6 月 10 日、県立広島大学、広島県広島市.

〔図書〕（計１件）

① 荒木浩編、小助川元太他、竹林舎、『中世の随筆　成立・展開と文体（中世文学と隣接諸学 10）』、2014 年、475-496（小助川担当箇所）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕

ホームページ等

http://kenqweb.office.ehime-u.ac.jp/Profiles/0003/0002662/profile.html

６．研究組織

(1)研究代表者

小助川元太（KOSUKEGAWA　Ganta）

愛媛大学・教育学部・准教授

研究者番号：30353311

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし